

『普陀洛記』によせて

宇多喜代子

大畑等は正真の新宮っ子である。平素、とくにそれを感じさせることはなかったが、たとえば本書の巻末に入集された「物語 熊野・新宮・お燈祭り」に書かれた「おとうの日」のことなどには、新宮っ子ならではの目がきらきら輝いている。

毎年の二月六日の宵に白装束の胴に縄を五重七重に巻き、白いけずりかけとよばれるたいまつを手到老若の男性が神倉山に登る。山で火をもらい、闇の中、その炎を手に掲げ飛ぶように駆け下りてくる。ただそれだけの祭である。戦時中、灯火管制のきびしかったときにも、この祭の火は絶えることがなかったそうだ。いつ始まった祭なのか、始まって以来、絶えたことのない火である。

### 流木の焚火のなかに国生まる

太平洋を眼前にした大浜とよばれる新宮の砂浜には、どこからたどり着いたのか大小の流木が転がっている。風化した流木はときにオブジェのように見える。ままその木を集めて浜焚火をするが、たぶん太古にもこのように人は火に集まったにちがいない。

蛇穴を出て神父然娼婦然

美しく泥を踏みたり十二月

火のまわりに人が集まる。おのずと聖俗混交の社会ができ、悲喜交々の暮しが生まれる。ここで新宮も近隣の町も村も山河海浜も、現実と概念を混交させた「熊野」という神話空間を担うことになる。

大畑等が東京を生活の場にして熊野新宮を留守にするようになってから、私は熊野行をはじめ、幾たびかお燈祭りの町をうろつき、いくたびか浜焚火の輪に入った。やがて同じく新宮っ子であった中上健次が文科省翼下の「大学」への反立の思いもあつてか「熊野大学」を創り、就中「句会」を創った。句の読み手であった中上健次は名だたる俳人の句にも増して、句会に集い来る浜や山のおばさん、おねえさん、町のおじさん、おにいさんたちの句が好きだった。もし生きていて大畑等の俳句を目にしたとしたら、ぼそっと共感したり、無言で罵倒したり、さぞ面白かつたろうと想像する。

鬼柚子や十五でたましい売りしかな

天上に秋雨が殺したものの一覽

など、中上健次の書いてきた物語の主題に通底した句いがある。(鬼柚子)の句はまことにおそろしい。かつて新宮の花街で売れっ子だった女性が、なぜか私に自分が十二歳のときにここにきたのだという身の上を縷々話してくれたことがあった。売られてきたけれど(たましい)は売ってはいないという顔つきであったが、この句を目にしたとき、十二で売られ遅しく生きてきた彼女の顔を思い重ねた。

この句のように「普陀洛記」の句群は、熊野と名指しされた深い山々、かなたに普陀洛山がある海原、その間に暮らす人々の表情をみごとに表している。

初湯して遠流の王の如きかな

夜桜の伊勢と熊野の境かな

死に死にて生まれ生まれて那智の滝

〈伊勢と熊野の境〉で、人々は生と死を千年二千年繰り返してきたのだ。ある鬻體は野に曝されてなお経を唱え続けたという。友人とともに山道を歩いていると、中の一人が突然「ダルがついたよお」と叫び身を震わせながら蹲る。慌てて路傍の木の葉をちぎって器として持ち合わせの食べ物を置く。ダルとは饑神のこと、飢えて行倒れになったり、戦の敗残者など、行き所のない者らの念が歩いている人に憑依する現象のこと、食べ物を差し出すと落ち着く。

### 冬三日月婆の尿欲り狼来

山中で尿る。獸らが尿中の塩気を舐めに来る。ダルの話と同じく、古くから言い伝えられてきた話である。土地の爺婆がいま見てきたように話してくれるのである。地の縁につながる大畑等は、絶滅したといわれて久しい狼をここに再生させているのだ。説話や物語の原初の地である概念の熊野へのただならぬ親和である。

『普陀洛記』の句を読んでいると、熊野を出て幾年も経っているのに大畑等は生粹の熊野の人であり、百回通っても千回通っても私は旅人でしかないということを思い

知らされる。

東京の大学を卒業して以来、大畑等は自らの仕事の多忙を極めながらも俳句に親しみ、現代俳句協会の役職をよくこなしてきた。とりわけこの十年間は「昭和俳句作品年表」の編集委員として並ならぬ力を尽くしていた。得意のパソコンで膨大な数の句を整理し管理するという、いわば年表委員会の元締めの仕事を引き受けていたのだ。それだけに、その完成を見ぬままに没したことが切なくてならない。

それ以上に、望郷の念を開放しつつ書き残した『普陀洛記』の上梓がその没後になつたことが、いかにも無念である。

いまとなつては、本集が鎮魂の高みに昇華することを願うばかりである。

〔著者紹介〕

おおはた・ひとし

一九五〇年和歌山県新宮市生まれ。

現代俳句協会会員。千葉県現代俳句協会会長（二〇一三～二〇一五年）。

「麦新人賞」「麦作家賞」受賞。

「現代俳句協会評論賞（第二十一回 二〇〇一年度）」受賞。

「遊牧」同人、「西北の森」会員。

句集に、『ねじ式』（二〇〇九年）。

二〇一六年一月、心不全により冥界へ旅立つ。享年六十五。